

国のかたち、崩壊とそれから

koberyo1

わたしが国を想うゆえに、われ現在、ここにありと思うのは、わたしと国とがやはり深いところでつながっている。すなわち、国がなければ当然わたくしはない、という強い思いがあるからに他ならない。

よくよく考えてみたところで、自分ひとりがいかにそれらしい正論を吐いてみたところで何の意味もない。

その頼みとしていた国家が、いきなり敗戦した。軍隊はすぐさま解体されたが、戦争はなぜ勃発し、どのようにして敗れたのかとか、ポツダム宣言の中身とか、米英中ソ連の行方とかはまったく語られることはなかったし、情報のないことが淋しかった。戦後すぐ青森は弘前市の母親の実家に行ったが、復員してからの三ヶ月は呆然とし、何をやる気力も起こらなかった。

幸いなことに母の実家は農家で、食糧には事欠くことはなかった。そして敗戦し、予科練まで行って軍人にろうとした自分であったから完全に目標を見失っていたが、それだけに何も考えず、農作業に打ち込む毎日はいあわせだった。

早実時代、夢中になって読んだ夏目漱石の本に「それから」があるが、昭和20年、8月15日、詔勅があった。まさに「それから」ではないが、世の中は一変した。二重橋前に国を想う人々LB参集して皇居を拝し、土下座して手を合わせる人も出た。

終戦まもない兵士たちのこと、一一陸軍や海軍のようすを少し書くが、陸軍の将校たちは徹底抗戦を叫んで巷間で問題視されたが、だんだん沈黙していった。一部には軍需品を持ち出しての脱走があったりして混乱を招いた。復員には貨物列車の無蓋車が使われ、人間扱いされないこともあった。兵士たちは武装解除で階級章をはがされたので上下関係はなくなった。それぞれ軍の支給品をまとめ、郷里に帰っていった。

また内地の各所では、その土地の魅力を感じ、残る者がいたり、よき伴侶をみつけ、その土地に永住を決意する者もあらわれた。

最初の復員兵は内地だけでも300万人から370万人といわれ、各都市では復員兵で混乱をきわめていた。

一方、海軍の艦艇の引き渡しは支障なく円滑にすすめられていた。当時の海軍に残されていた船は168隻と推測されている。そのうち、「作戦遂行可能」とされたものは43隻であった。艦種別にすれば、戦艦はゼロ、空母は二隻、巡洋艦3隻、駆逐艦16隻、潜水艦7隻だった。船はスクラップにされたり、爆破されたりした。なお一部の戦艦は水爆実験のために利用された。

陸軍省、海軍省は廃止された。明治の大村益次郎（陸軍）、勝海舟（海軍）ら創設者の精神から75年、帝国陸海軍は滅んだ。

米軍の最初の進駐地は厚木飛行場であった。残った飛行機のプロペラをはずす作業にかかった。千葉県笹川に構築された本土決戦基地では、きたるべき戦いの日のために水上特攻艇が準備されていた。水上特攻艇「震洋」は小型艇で、敵の上陸用艦艇に体当たりする目的でつくられたが、この時期にこれも解体された。

帝国陸海軍の話はいろいろあるが、米国の空襲はすさまじく、昭和20年3月10日にB29が襲来し、投下された爆弾によって東京は完全に焦土化した。

この状況については五月中旬頃、父からの一枚のハガキで知った。その焦土でのガス管の復旧をするため、「ガス管の整理を「東京ガス」は実施していた。気の遠くなるような作業が焦土の中、すすめられていたのだった。当時、東京ガスの社員だった父はだったが、東京で頑張っていた。

戦争は終わったが、焼け跡の市民には、新しい戦いがはじまっていた。生きることへの戦いがある。食糧もなかった。住む家もむろんなく、もちろん働く職場もなかった。バラック小屋での生活、焼け残った家には何家族も同居していた。飢えは現実の不安として毎日の切実な思いだった。厳しい戦争の時代を、こうして生き延びてきたの日本人の底力をひしひしと感じた。

新しい時代がくる。希望に燃えていた。人々は立ち上がる意気込みがあった。飢えをしのぐには田舎に買い出しに行くしかなかった。そのために皆、都市と農村を結ぶ列車に乗った。芋の買い出し客で列車の車輦は人であふれ、窓が出入り口となった。ヤミ物資の集積場が各所にできたが、そこには怖くて近づくことができなかった。

進駐軍はオオカミで、女、子どもを襲うという話はあとでデマということがわかった。女性は夜間はもちろん、あまり外出しなしことにして欲しいと隣組の回覧板で回された。

マッカーサーが厚木に降り立ったのは8月30日のことである。占領時代がはじまった。進駐軍はオオカミではなく、子どもたちにチャコレートやガムをくれる兵隊さんたちだった